

## 第2回奈良市教育振興戦略会議 会議の概要

開催日時：平成26年10月20日（月）14時15分～16時15分

開催場所：はぐくみセンター9階会議室

出席者：委員 柴崎洋平（フォースバレー・コンシェルジュ代表取締役社長）

委員 藤沢久美（シンクタンク・ソフィアバンク代表）

委員 藤原和博（教育改革実践家、元杉並区立和田中学校校長）

委員 松田悠介（Teach For Japan 代表理事）

委員 毛受芳高（一般社団法人アスバシ教育基金代表理事）

仲川げん（奈良市長）

中室雄俊（奈良市教育長）

### 1 挨拶（奈良市長 仲川げん）

### 2 議事

#### （1） 前回のまとめの確認

##### 【毛受議長】

- 前回の話し合いで、委員の皆さんの総括的な思いを聞き、「グローバルな人材」、「デジタル機器の利用」、「トラッキング」、「教員の研修」、「貧困問題への対応」といったものが出てきた。
- 「出した意見が形になって出てくるようにしないと意味がない」という意見もあった。
- 今回は、各委員から「こうしたらいいのではないか」という哲学や意見をいただき、議論を深めていきたい。

##### 【柴崎委員】

- 我々、委員が話しすぎず、市長、教育長の意見を伺いたい。皆さんの意見を知らないと、議論が深まらない。

#### （2） 各委員からの提案

##### ①柴崎委員からの提案

##### 【柴崎委員】

- 日本のオリジン・奈良から日本を変えるべく、世界で勝負できる人材を奈良市で育成・輩出する

##### 【仲川市長】

- 奈良の良さを理解しないまま外に(出て行く)という子が多い。世界を意識することで自分たちの(奈良という)ルーツを感じてほしい、と取り組みをしてきたつもりであるが、出口をイメージしてやっていきたい。
- 職業人像について、つめすぎてもいけないし、ボヤッとしすぎているのもいけないし、フォーカスをどうするべきか難しいところである。

##### 【中室教育長】

- 一条高校では、数名であるが海外に行く、また、海外の学生を受け入れるというプログラムがあるが、公立の小中で、ということは考えてこなかったのも、とても刺激的な提案であると思う。

【松田委員】

➢他に、今そういった制度はあるのか。

【仲川市長】

➢スポーツで1番になって行く大会などは公費を出すことがあるが、教育、文化では無い。また、中学生はできそうだが、小学生は難しい。姉妹都市と、交流クラスとしてつなぐことは可能だが、「海外の同年代に、すごい人がいる」と実感するのは難しい。

【毛受議長】

➢あまり前例がない小学生についての取組を奈良がやるからすごい。選抜チームを作るイメージ。  
➢グローバル人材育成の解決策として、他に類する提案はあるか。私の提言では、バカロレアを土台にして、中学校3校・小学校10校くらいに導入するという提言。  
➢いきなりトップは難しくても、アジアのすごい人に会うことで目線が上に上がっていく

## ②藤原委員からの提案

【藤原委員】

➢『奈良市は、各家庭からいただいている教材費（私費会計で家計に負担してもらっている毎月の費用／給食費とは別に徴収しているはず）の3分の1を、未来に必須のリテラシーであるICT教育に投じます。』  
➢『奈良市の教員は、「教員免許」を持っている先生に限らず、30万人の市民を先生として、2万6000人の子どもを育てる教育を行ないます。』  
➢教育目標は校長権限だが、簡単に変えられるものだと思っていない。

【中室教育長】

➢教育委員会がリーダーシップをとることは可能。そのためには、準備や覚悟が必要であろう。

【毛受議長】

➢「ナンバーワンで競争を勝ち抜くのではなく、一人ひとりがオンリーワンに」という考えは現場に入ってきているが、中身は学力でしかない。  
➢どの分野でオンリーワンにするかは家庭の事情に依存するので、そういった環境要因を提供できるところの子どもだけがレアになっていく。

【藤原委員】

➢オンリーワンとはつまり、分野別ナンバーワン。「それぞれのユニークさでいく」と言ってあげると子どもが楽になり、いじめもなくなる。  
➢教室にいろんな窓口を作ることで、教育コンテンツが外部から入り、学校の先生以外から学ぶことができる。すなわち、インプットのルートを増やす。  
➢学校は発表の場として、意見を聞いていく。  
➢「(教材費の)全部をICTに」だと不安だが、「1/3をICTに」なら親が不安にならないのではないか。

【松田委員】

➢市教委が予算をのせればいいのか。長年使うなら、長く使えるものに投資し、学校単位で買って残るようにしていけばいい。

【毛受議長】

➢「ICT必ずしも学力上げない」ということが言われていた。今どこまで調査の数値は出ているか。

【藤原委員】

➤明らかな数字がないからチャレンジできるわけで、みんながするものをチャレンジする必要はない。

**【松田委員】**

➤インプットしたものを引き出す学校の中の仕組みをつくらないと、ICTだけで学力は上がらない。ハード面を変えると人は適応しようとする。ソフト面をどう考え直していくか。教員のマインド、ダイバーシティマネジメントが大切である。教員が理解し、体現し、マネジメントできないといけない。

**【仲川市長】**

➤0か100ではなく要はハードとソフトの組み合わせ。来年4月からハードが用意できて、教員追いつかないとなった場合、何をそろえればいいのか。

**③毛受議長からの提案**

**【毛受議長】**

➤哲学 奈良市で生まれた子供が、地域の担い手と成長するまでのプロセスを、最後まで見守り支援していく「架け橋」のような教育を築きます。

提言1 奈良市の未来を支える人をつくる「奈良未来チャレンジ・インターンシップ（仮称）」を、一条高校、その他県立高校、私立高校と連携して、奈良市在住、通学の高校生に提供します。

提言2 奈良市の子どもたちが、小中高大と育ち、地域の担い手になるプロセスを検証するために、学年毎で進路選択・教育効果のトラッキング調査を実施し、教育施策・教育投資の効果の最適化をめざす。

提言3 これまで全学校に構築してきた学校支援地域本部を、地域の人材ニーズをくみ取り、地域の担い手を育てていくための教育プログラムを企画・実施できる自立型の組織に育てるための「学校支援本部バージョンアップ」事業を実施します。

提言4 これらの仕組みが、奈良市の税収に依存せず、今後も継続して発展していくための財源づくりとして、奈良市の教育をさらに充実し、これからの社会・産業の担い手に育てていくための「ソーシャル教育投資」を、ふるさと納税などの仕組みなども取り入れ、「奈良市若者未来基金（仮称）」を創設する。

**【藤原委員】**

➤地域社会が一緒に入り込んでいるところは、頭が柔らかく力のある女性が活躍しているケースが多い。積極的に動けるパワーある女性の養成が必要。

**【毛受議長】**

➤財源がないと。実を削る状態では長続きしない。

**【藤原委員】**

➤個人として力のある人が必要なわけで、組織の序列を引きずってはいけない。

**【松田委員】**

➤入ってくれる人の役割を明確にすることも大切。「地域をとりあえず巻き込め」ではなく、どういうことをしてもらうかを明らかにするべき。

**【毛受議長】**

➤ボランティアだけでなく継続できる仕組み、すなわち予算が必要。

➤地域のグローバル化進めるプログラムができれば変わっていく。

#### ④松田委員からの提案

##### 【松田委員】

➤「教育は人なり」に表現されるように、教育の質は教員の質を超えることはできない。奈良市で日本・世界をリードする教員採用・養成の仕組みを確立する。

1. 全国（全世界）から優秀で情熱のある人材を教員として採用する仕組みづくりの確立
2. 外部組織と奈良市教育センターの連携を通し、教員養成の仕組みの改革

##### 【中室教育長】

➤教育センターのカリキュラムについて、抜本的なところには手をつけられていないことが課題である。

➤採用段階で、いかに質の高い人を確保していくかという点において、特別免許はノーマークだった。調べてみて、可能であるならば、幅広く採用することを考えてみたい。

##### 【松田委員】

➤教員に、いろいろな経験があるということは付加価値となる。特定課題についてはビジョンがあるが、コアのところのビジョンが抜けてしまうと、研修を提供している側は満足だが、受ける側にとって意味がないものになってしまう。

##### 【藤原委員】

➤松田委員のようなところが一括して養成して送り込んであげるほうがいいのではないかと。ビジネスの世界で通用しない人は教育の世界でも通用しない。ノウハウを持った人が鍛えて送り出したほうが良いと思う。

#### ④藤沢委員からの提案

##### 【藤沢委員】

➤教育を効率化して、小学校中学年～中学校ぐらいまで一貫して自分の得意なもの、すなわち自分の支えになる専門科を作る。

➤先生に課題がある部分がある。先生のスイッチが入る機会が必要。その機会として、海外に一ヶ月授業体験してもらう必要があると思う。新しい先生を育てることも大切だが、今、学校にいる先生の可能性を開くために刺激が必要。

➤お金については、奈良で育った子が結局どうなればいいのか、20年後の奈良はどうなればいいのか、教育に責任を持って入って、お金を出してくださいと言える。

##### 【仲川市長】

➤全員を奈良に囲い込むつもりはない。奈良の外で活躍してもいい。

➤奈良で育った人が、奈良の外で活躍し、そのうちの何人かが奈良に戻って、街づくりに関わってくれる。

また、逆に、奈良出身で世界に飛び出し、世界の人から感謝されるような人がいれば、奈良に残っている人のモチベーションにつながっていく。

➤職と住の分離している状態であるので、奈良の教育が上がれば企業も盛り上がるとうまくリンク付けできれば。

##### 【松田委員】

➤ふるさと納税を効果的に活用。「タブレット基金」を設立し、奈良にルーツのある人、企業に協力してもらおう。

【柴崎委員】

➤そういった形でお金を出していただくためには、教育を変えていくのかこのままでいくのか、教育をどうするかと思いがないと出していただけない。

(3) まとめと、次回の議題について

【藤原委員】

➤どこまでやりたいかを出す必要がある。全てを網羅的に(やる)はダメ。「この3つをする」というように提案してほしい。

【柴崎委員】

➤刺激と難易度のバランスが非常に重要である。

【松田委員】

➤薄く広くはダメ。何校かでうまくいくなら全校に。段階的に効果検証しながら事業を進めていくことが大切。

➤汎用を見据えたモデル、将来60校でできるモデルを考えないと意味が無い。そうすればいいものができる。

【藤原委員】

➤ICTではなくてビデオがいい。止められるし、スピードを変えることができる。

➤先生が教材作りをする、というように先生を巻き込む。

【松田委員】

➤よく教育委員会などと話をすると、リスク恐れているように感じることが多い。失敗も織り込み済みで、課題へ対処しながら先端のものに成長をさせていく覚悟が必要。

【毛受議長】

➤今回は、奈良市は何を本当にしたいのか出して欲しい。

【柴崎委員】

➤我々が投げたボールへの返答をメインにしていけない。参考にしつつ、どうしたいのか、が次回のスタート。

3 挨拶 (奈良市教育長 中室 雄俊)

閉 会